『文脈を失くした言葉たち』

八戸工業大学第一高等学校
北上にこ

　スマートフォンを開き、何の気なしに「メモ」のアプリを開いた。そこには過去の自分が書き散らした脈絡の無い文字列がいる。やることリスト、買い物する予定の物、心に響いた小説の一文、そして—。
「流浪のギャル」
なんだ、これは。一瞬、自分の指が勝手に打ったのでは無いかと疑ったが、間違いなく私自身が入力したものだ。いつ、どこで、どういう意図でこのフレーズをメモしたのか、まったく想い出せない。記憶の片隅をいくら探っても、そのときの情景も、感情も何一つ引っかからないのだ。
　人間は忘れる生き物だと感じる。そして、デジタルデバイスは、そんな私達の脳の外部記憶装置として機能していると思う。私達は忘れないために、一瞬のひらめきや大切な情報をそこに書き込む。しかし皮肉なことに、外部に頼ることで、「自力で思いだす」という本質的な筋肉は衰えているように感じた。
　「流浪のギャル」は、その現象を象徴しているのかもしれない。当時、私にとって何か重要な意味を持っていたはずのフレーズ。誰かの話か、街で見かけた強烈なファッションか、あるいは深夜に見た夢の残骸か。メモした瞬間の私と、それを読み返している今の私との間に、深い断絶がある気がした。私がこのフレーズをメモした目的は、「忘れないため」だったはずだ。けれど実際に残ったのは「情報」だけで、その情報に付属していたはずの「コンテクスト」は置き去りにされていた。情報だけがデジタルの海に打ち上げられ、その背景にある感情や出来事は、すでに脳の奥深くにしまわれてしまったのだ。
　言葉は、本来それ単体では生きることが出来ないのかもしれない。発せられた場所や時間、一緒にいた誰か、声の温度や視線の向き。それらが絡み合い初めて言葉は意味を持つ。しかしメモアプリに保存された瞬

間、言葉は文脈から切り離され、ただの記号になってしまう。「流浪のギャル」は、そうした感情の体温を失ったまま、画面に存在した。私はそれを見つめながら言葉を残したつもりで、実は体験を手放していたのだと気づく。

　この摩訶不思議なメモは、私に大切なことを教えてくれるような気がした。それは真の記憶は、ただ記憶することでは無いということ。真の記憶は、五感と感情、そして思考が絡み合った体験そのものであり、それはいつまでも、私達の内側にしかない。もしあのとき私が、このメモと一緒に「帰り道に見つけた、ピンク髪の女性」や「友人とふざけて考えた小説のタイトル」と言った文脈を一言添えていたら、このフレーズは鮮やかな記憶として脳の引き出しを開けることができたかもしれない。しかし、文脈のない「流浪のギャル」は、宙に浮いたまま私を戸惑わせる。

　結局、「流浪のギャル」の意味は永遠に闇の中だ。今の私なら、この言葉に何かを書き添えるだろう。それでもきっと、完全には残すことが出来ないだろう。この謎のフレーズを前にして、過去の自分に思いを馳せる。「ああ、私は忘れる生き物なのだ」と深く痛感する。そして、この「忘却」の事実こそが、今この瞬間の体験や感情をより丁寧に、より深く心に刻もうとする動機になる。

　私達は忘れ続けると思う。だからこそ、今この瞬間を生き、心に刻むことの価値を知るのだ。そしていつかまた、その「流浪のギャル」のような、意味不明な過去の自分に出会ったとき、笑って許せるだけの新しい記憶を、今日という日に積み重ねていきたいと思う。